小噺

キャプテン

カムバッククワガタ

10年以上前の今頃、家のベランダには虫かごが放置されていた。
虫かごの中には湿った土とハチミツを入れる穴の空いた木、そして数日前に餌として与えたゼリーのゴミが入っている。
そこに住むクワガタ・カブトムシの数およそ10数匹

ある日、母はキャプテン少年にこう告げた

『世話できないなら逃がしてきなさい!!』

正論であった。

(死んでもまた捕まえてくるし…)

クワガタは腐るほど近くの雑木林に生息していたのだ。
1回の虫取りで、今虫かごに入ってる量を捕まえてくることが可能だった。
実際は1人で行くわけではないので(そんな寂しい小学生ではない)一緒に狩りを共にした友人達と分け合う。
しかしそれでも2,3回行けば、もう既に虫かごの量に匹敵するであろう。
本当にクワガタは腐るほどいたのである。

死んでも代わりはいくらでもいるんだよ

そんなアニメの敵キャラの放つ一言のような考えを持っていたおそろしい少年であったが、母に怒られ渋々虫かごを抱えてアパートの階段を降りていった。

雑木林まで行かなきゃならないのかと、自転車の前にしゃがみこんだキャプテン少年は、一言こうつぶやいた

『めんどくさいなう』

時刻は夕飯前の夕方である。いくら明るくても夕方。しかもお腹の空いた夕飯前。
家から雑木林までは、自転車で2,3分ではあるけれど、非常に億劫であった。

(どうせ逃げるのなら、こっから雑木林まで飛んでいってくれないだろうか)

キャプテン少年はふと周りを見渡した。

すると、目に止まったのは一本の植木である。それは向かいにある美容院の生け垣のものだった。
キャプテン少年は生け垣の前に移動し、虫かごからクワガタを取り出した。

ペタッ
植木に乗せた。
続いてもう一匹
ペタッ

その後もキャプテン少年は、まるでシールを貼るかのように虫かごの中のクワガタ達を、向かいの美容院の生け垣へとくっつけていった。
時には植木から飛び立つクワガタもいた。
それを見てそのまま上空へ投げて飛ばしたりもしてみた

(まぁ夜になったら活発になって何処かへ飛んでいくだろう)

こうしてキャプテン少年はクワガタ解放作戦を終了させ、家へと戻り、おいしくハンバーグをたいらげた。

翌日
リビングでポンキッキを見ながら朝食を食べていると、玄関のチャイムが鳴った。
母が玄関の扉を開けると、そこには美容院のおばさんが立っていた。

「ごめんなさいね。いきなりこんな朝早くから」
『いえいえ、何かご用ですか？』
「実は今朝お店の準備をしていたらね、店先でクワガタを見つけたのよ」
『え?！』

？！

「でね、びっくりしちゃって、どっかから飛んできたのかなあと思ったら、生け垣に10匹ぐらいクワガタがいたの！」
『……』
「で、なんだか珍しくてもったいなくなっちゃって、息子さん2人いらっしゃるでしょ。だからもしよかったらどうかなって思って持ってきたのよ。」

戻ってきた。

逃がしたはずのクワガタ達は、わずか1日にして家と帰ってきた。
奇跡としか言いようがなかった

おばさんが帰ったあと、キャプテン少年はこっぴどく怒られた。
それ以来、虫取りには毎年行っても、クワガタを持って帰ることは一切しなくなったという。

ぼくとライガー

おれは過度な期待をしない人間なのです。
ネガティブ思考ですね。
しかし、そっちの方が得なんじゃないかと考えるのです。
期待しすぎてダメだったら立ち直れないし、良い結果だとしても、「当然」みたいな感じになってしまうようで。

小学生の頃から過度な期待はしなくなりました。
３年生の頃に２泊３日で仕事体験をした動物園でのこと。初日の見学で、案内してくれるお兄さんがこう言ったのです。

「ウチにはライガーっていう、世界的にもとても珍しい動物がいる。日本でも数える程度しかいない貴重なものだ。近いからまずそれから見よう！」

ライガーってのは、まぁライオンと虎のハーフです。
ちなみに雌雄が逆になるとタイゴン。
クォーターはリリガーなんてのもいます。

小学３年生の頃のおれはひねくれていて

「そんな珍しい動物を、栃木なんかで管理して良いわけがない！国の対応はおかしい」

と思ったものです。
けれど、世界的に珍しいことはもちろん。
百獣の王ライオンと、そのライバル的位置付けをイメージする虎の合体というのは、当時の小学３年生にとって、ドラゴンボールで言うところの悟空とベジータ。
つまり魔神ブウ戦のベジットみたいなものです。
期待しないわけがない。

ライガーの檻の前に着き、群がるみんなを押し退け、おれは遂にライガーと対面しました。
ライガー、めっちゃぐったりしてた。
そう。ハーフと言っても人工交配によるもの。自然に反するものなのですよ。
だから寿命も短いし、繁殖能力もほとんど無い。
遺伝子的病気を持つことが多い。
あんなにも大きな動物がぐったりしている様子ほど、切ないものはなかった。

「最近、元気がなくてね…餌もほとんど食べないんだ…もうすぐ死ぬなぁ…」

そう語る飼育員さんを横に、こんな裏切られたような気分になるなら、おれはもう過度な期待はしない。
そう誓ったのです。
欲張らず期待せず、ただただ運命を受け入れる。
そんな悟りを開いたお坊さんのごとき姿勢で生きていきたいものです。

ひとりぐらし

一人暮らしに大層憧れる友人がいた

「いいなぁ一人暮らし。いいなぁ」
『実際にしてみるとそんなに良いものではないかもしれんよ。』
「それでもしたい!バツイチの美人な管理人さんのアパートで一人暮らしがしたい!」
『今からそんなめぞん一刻な一人暮らしを期待してるようなら、きっと痛い目みる。悪いことは言わない。やめときなさい』

彼は一人暮らしに大層な幻想を抱いていた。
一人暮らしを始めれば、自動的に恋人もできると信じて疑わなかった

この春から初の一人暮らしを始める方も多いと思う。
浮き足だって部屋のインテリアや、雑貨を妄想しては、「シシシシシ」と、チキチキマシン猛レースのケンケンみたいなはしたない笑顔を撒き散らしているに違いない
恥を知れ！

かくいう自分最初はもそうであった
日々上達していく料理の腕前
部屋の細部にまでこだわったインテリアコーディネート
友人を招いての連日連夜のパジャマパーティー
そんなものはみんな幻想だ！
実際の一人暮らしはとてもそんな美しいものではなかった
。
手間・洗い物・孤独のトリプルパンチの自炊
インテリアや雑貨なんか買っても邪魔なだけだということ
友人を招く前と招いた後の片付けのとんでもない煩雑さ

人参の役立たなさに泣き
ウィンナーの値段の高さを知り
むね肉ばかり摂取するようになる

避けて通れない台所の排水溝との戦い
ゴミ出しに間に合わなかった絶望感
いくら片付けても数日で部屋に再び散らばる無数の毛に焦りを覚えたりする

自分は果たして声が出るのか心配になり

音が欲しくてテレビをつける

シャワーだけにしか使ってないはずのガス代の高さ
プロパンガスの異様な高さ

どんな強固な守りを敷いても現れる黒い謎の侵入者たち

一人暮らしに美しさなんて存在しない
あるのは生と死をかけた孤独な戦いだけである

「それはお前に限ったことだけじゃないのか？おれにはバツイチ美人の管理人さんや、ステキで美しい隣人が待ってるハズだ」
『美人の世話好きなお姉さんなんかいないということもおれは知っている！』
『それにおまえ、おれだけなんてことあるか!そんなことあったらおれは泣くぞ。全力で泣くぞ。おれの今までの苦労返せよぉって100％の力で泣くぞ』
「そんなことに全力を注ぐのはおすすめしない」
「でもそうかぁ。たしかにたいへんだとは聞いていたが、そんなにたいへんか。でも、それでもいつまでも実家にいるわけにはいかないだろう」
『それはそうだ。おれは一人暮らしに安易な期待をするなと言っている。実際の一人暮らしの楽しさなんてものは、いまお前が抱いてる一人暮らしの楽しさの4％だ』
「96％どこいった!?」
『はじめから存在しなかったということだ。もしくはイケメンで金持ちで優秀な一人暮らしのもとに充てられている』
「そんな不公平な世の中いったい誰が作ったんだ!!!あんまりじゃないか！」
『一人暮らしすると、今まで見えなかった社会の闇や嫌な部分も目にするのだよ。』
「そんな…一人暮らしっていったい…」
『あきらめろ。最初からあきらめれば、程々に楽しめるさ』

こうして一人また一人と、一人暮らしに幻想を抱く青年を改心させていく、宣教師キャプテンだった

靴を買いに

『褒められるといろいろ伸びます』

これはおれのキャッチフレーズです。

「いろいろ伸びるとは何だ。いやらしい！」

と、怒りの言葉を友人から受けたりもした。
いろいろとは鼻のことである。
褒められると成長するのと共に、鼻も伸ばして天狗になることを言っているのだ。
何がいやらしいだ。けしからん!

まぁそんな話は置いておいて、おれは褒められるのに弱い。
しかしなかなか誰も褒めてくれないので、時には自分で誉めてあげるぐらいだ。
褒めたあと物凄い切なさに追いやられることもしばしばである。

ある日、靴を買いに行った。
履いてる靴がボロボロのクッタクタで、裸足で歩いてるのと変わらないくらいなので。

最初に訪れた店で、ある程度の目星をつけたのですが、金をおろしてないことに気づき、ATMに行きました。
お金をおろし、再び靴を買いに戻る途中、別のお店を見つけたのです。
まぁ参考に覗いてみようと、店に入り物色している時でした。
iPodを聞きながら眺めていたのですが、何やら曲の歌詞とは別の声が時おり入ってくるのです。
コワイ…

父さん、父さん、魔王がぼくに何か囁くよ。
枯れ木が風で揺れている音だ

気になるのでそっと横を見ると、そこには魔王ではなく、背の低いメガネをかけた、つじあやの似の店員さんがおった。

（え、もしかして私の言葉が全く聞こえてなかったの？）という、困惑の表情で苦笑いする店員さんに、ど、どうも…と、こちらも苦笑いでお返しした。

『…どういった靴をお探しですか？実は良いのがあるんですよ。』

と、店員さんは丁寧にもう一度一から話しかけてくれた。

おれは『やばい。捕まってしまった…』と思うものの、先ほどの非礼もあるので、言われるがまま、店員さんの話を聞いた。
店員さんは何やら最近出てきた新しいブランドの靴をごり押ししてきた。
見てみると確かに、良い感じではある。
けれど、靴にはいつも3000円でテキトーに済ましてるので、ちょい高めの8000円の洒落た系のその靴には、少しばかり抵抗がある。
しかしまぁデザインなどは確かに求めてるものと一致する。

『どういうもの探してるんですか？色とかデザインとか…』
「え、いやまぁ…秋なんで秋っぽいもの買おうかなぁと…」

そうおれが答えると、目の前のつじあやのさんは、パチン！と手を叩いた
びっくりである。
なんで相撲をとってるわけでもないのに猫だましされなきゃならんのかと思った。

つじあやの『良い！良いですっ！』

なんか知らんが、つじさんはおれのその意見をべた褒めした。
エヘッ

『秋に合わせて買う人はオシャレなんです！』

ほほぅ

『秋って季節の中でも短いじゃないですか。だからその短い期間にでも、合わせて服や靴を買う人はオシャレなんですよ！いやぁ〜オシャレですっ！』

オシャレというものは、自分からは２万マイルぐらい離れていて、ノーチラス号にでも乗らないと到達できないものだと思っていたが、まさかこんな近くに転がっていたとは…

その後もつじあやのさんは、試しに履いた姿を褒めたり、服装ともピッタリだと、ドンドン持ち上げてくる。
エヘヘ
しかしおれも阿呆ではない。
ここで財布の紐を緩めてしまうと、後々その緩めた紐が、余ったところを使って首を絞めてくる

のである。
おれは意を決して「保留」という処置を取り、別の店も見てきたい旨を伝え、店を後にした。
8000円はなぁ…

そして最初の店に行き、目星をつけていたものを履かしてもらうことにした。
するとその時の店員さんの対応が、やけに素っ気なく感じた。
つじあやのさんはもっとガンガン褒めてきてくれたのに…

次第になんだかその靴にも魅力を感じなくなってしまい、結果店を後にした。
そして再びつじあやのさんの元に戻ってきた。
彼女は大層な喜びのあまり、壁にもたれて倒れそうになっていた。

靴を購入し、財布をしまおうとすると

『その財布可愛らしいですね!チャックのところが特に良いです。』

と、最後におれの財布のポイント部分であるチャックまで褒めてきた。
なんなんだココは!
どれだけ客を持ち上げてくれるのだ！

たしかに靴は8000円だった。しかし、つじさんの接客はプライスレスであった。

輪ゴムをめぐる冒険

それはある日のの深夜のことだった。

ロフトに昇るのが面倒だったので、その日はソファで寝ることにした。
多少寝苦しくはあるけれど、ロフトにぺらっぺらの布団を敷いただけの場所で寝るのも、かなりお尻や背中が痛くなるので、そんなに大差はなかった。

電気を消して、明日はやらなきゃいけない事をやるか、やりたい事をやるか考えながら寝ようと試みるも、なかなか寝つけず、だんだん暗闇にも目が慣れてきた頃にそれは現れた。

「ん？！」

ふと部屋を眺めていると、ソファの目の前にあるテーブルの下に、何やら細長く黄色っぽいものがあった。

「やだ何これコワイ…」

多少の恐怖心を抱いたが、すぐに答えを見いだした。

「パスタだ」

この日はパスタがあまっていたので、昼と夜にパスタを食べたのだ。
しかし、まさか22歳にもなってパスタを食べこぼし、あげくにはそれに気づかないとは…
とんだお茶目さんである。
テヘッ

おれはとりあえず、朝起きてうっかり踏んでしまったら嫌なので拾おうとした。
すると

「うわぁ!!グニュグニュする!!パスタじゃない!!!!」

そう。パスタだと思ったそれはパスタにあらず。
なんと輪ゴムであった。

「びびらせやがって！」

冷静さを取り戻してそう怒るも、すぐに次の疑問が浮かぶ。

「え？誰の輪ゴム??」

無論、この部屋はおれ一人で暮らしてる部屋なので、その空間にあるものは当然おれのものなのだけれど、この目の前にある輪ゴムには、全くもって見覚えかない。

「やだ何これコワイ…」

いま目の前に見覚えのない輪ゴムが１つ。
いったい何だこれは…

普通の輪ゴムならまだ理解はできる。
しかし目の前のこれは普通の輪ゴムではない。
大きさがあまりにも大きい。
おれの両腕が、広げない状態のままで余裕で通る。

業務用だ。
たぶん太もも以上の太さの輪ゴムである。
こんな巨大な輪ゴムでとめるようなもの、買った覚えがない。
最近買った大きな買い物と言えばポケモンぐらいである。
というか、普段の食事を除けば、戻ってきてから買ったものは、ポケモン、漫画の単行本、ジャンプぐらいの、物凄くそれはそれは質素なものである。

こんな輪ゴムに見覚えはない…

しばらく輪ゴムを伸ばしたりしながら考えていると、１つの仮説を見いだした。

『はるか昔からあった輪ゴムが、部屋の整理で出てきた説』

もとから存在していたものではないだろうか。
最近買ったものではなく、以前に買ったものについてきた輪ゴムであり、部屋を整理している途中、どこからか出てきたのではないか。
しかし、はたしていつ出てきたのか

２日前におれは、部屋があまりにも段ボールや家具でごちゃごちゃしてるので、一通り掃除をしたのだ。
段ボールを隅に積み上げ、床も掃除した。

掃除機をかけ、コロコロをし、クイックルワイパーで磨いたのに、いったいどこで輪ゴムを見落とそうものか。

部屋を掃除した次の日の昨日は、朝から浅草に行っていた。(だじゃれではない)
帰ってきたのは夜で、テレビ見て寝ただけ。
そして今日もテレビ見て寝てるだけ

「何やってるんだおれはっ！」

違う。そうじゃない。今はだらけた生活を憂いてるのではない。
問題はこの輪ゴムの侵入経路である。

「はっ！まさか…」
「どこからか放たれてきたのか…!!」

この大きさの輪ゴムである。
多少離れた、見えない位置からでも飛んできてもおかしくはない。

『スナイパー説』

だとしたら一大事だ!!
命を狙われているぞ！しかも輪ゴムで！！
おれはガグガクと震え、そして…
気がつくと朝だった。
爽やかな朝の日差しに起こされ、わりとよく眠れたなぁと思いながら、立ち上がろうとソファに手をつくと…
グニュ

「うぉぉぉ!!!!」

昨夜の輪ゴムであった

結局、輪ゴムの侵入経路は分からず、しかも危惧していたうっかり踏んでビックリするという、ベタな展開にさらに驚きであった。

誰か輪ゴムをぶっ放した記憶のある方は直ちに回収に来てください。
このままじゃ怖くて眠れません。
いやまぁ考えつかれて寝ましたけど。

ふたご座流星群

小さい頃から星空を眺めるのが好きだった。
この季節に東の空に輝くのは○○座で、とかそういった知識はない。
ただ単純に、キラキラ光るあの物体が、今自分がいる場所とは遠く離れた惑星で、そこにも土やこういった空間があるという事を考えるだけで落ち着いた気持ちになった。
同じようにその星空を静かに進む飛行機にも、たくさんの人が乗っていて、本を読んだり、仕事をしたり、寝ているのかと想像すると、なにやら不思議と落ち着いた気持ちになれた。
それはもしかしたら、前世とかオーラとかいう、スピリチュアル的なものなのかもしれない。
普段から夜に窓から空を覗く習慣はあった。
けど、その日は特別だった。

「流れ星がたくさん見れる日」

母がそう教えてくれた。
年に数回しか見れないチャンス。だけど見れる時間帯は、当時のぼくには遅すぎた。
流れ星を見たことが無かったぼくは、まだ足し算もおぼつかない頭ながら、どうやったら起きていられるか考えた。
結局、砂糖が山ほど入った甘いコーヒーをたくさん飲んで、見たこともないＴＶ番組を見て時間を過ごした。

「もう眠いんじゃねぇか？」

眠たそうな兄にバカにされながら、もっと眠たそうなぼくは「そんなことない！」とあくびをしながら頑張った。
しかし結局、小さいおつむを使い果たしたせいか、いつもより少し遅れた時間に寝てしまった。
しばらくすると体が揺れる感覚に気づいて目が覚めた。
ぼやけた視界には「ほら、そろそろ流れ星来るよ」と、ぼくの分のジャンパーを手に持った母親がいた。
ベランダに出ると、ずっと起きていたのにも関わらず、すっかり眠気が覚めた様子の兄が星空を眺めていた。

「さっきあっちに流れた！」

すでに流星群は始まっていて、見渡せばあちらこちらで流れ星を見ることが出来た。

「あっ！ほら！あっ！あっちも！」

願い事を３回唱えるのは知っていたけれど、その時はただ、この神秘的な状況を１秒でも長く眺めていたかった。

しばらくして母親が、３人分の暖かいココアとおにぎりを持ってきてくれた。おにぎりとココアは合わなかったけれど、狭いベランダで３人で星空を眺めて食べたおにぎりは格別だった。

それから毎年、流星群が見れる日は、最初に見た時と同じようにベランダで見る習慣が続いた。
しかし年々経つにつれて、母が仕事を始めたり、ぼくも部活に入って朝練があったりして見なくなっていった。
妹が大きくなって「見たい！」と言い出してしばらくはまた見るようになったけれど、結局それもすぐに飽きて見なくなった。
ぼくの数少ない母親との思い出。

そんな事を思い出しながら、今日ふたご座流星群を見た。
それは、あの夜見た景色と同じようにきれいだった。

変わらないようで実は時間はしっかりと流れている。あの頃永遠だと思っていた時間は、決して永遠なんかではなかった。時間はこれからもしっかりと流れ、ぼくは歳をとる。
それでもぼくはきっと星空を見続けるだろう。
楽しかった小さい頃を思い出して落ち着くから。